

九七三 in 宮崎

号外

山野良一氏やまのり
 りょういち 千葉明德
 短大教授) 1960年
 北九州市生まれ。北大
 卒業後、神奈川県入庁。
 知的障害者施設、児童
 相談所勤務を経て、2
 010年退職。著書「子
 どもの最貧国・日本」
 (光文社新書)など。

貧困断ち子供救おう

事例や講演通し500人決意

「貧困は子孫に遺伝する。断ち切る手助けが必要だ」。第22回「人間らしく働くための九州セミナー in 宮崎」は11月5、6日の日程で、宮崎市民プラザで開幕した。九州各県持ち回りで開いており、毎年、労働者団体などが地元の事例や問題を掘り起こして発表する場となっている。約10年ぶりとなった宮崎でも、10を超える団体や、弁護士、専門家が実行委員会を組織し、この日のために調べてきた事例や情勢などを持ち寄った。初日の5日は、県内外から500人が来場。基調講演や、パネルディスカッションを通し、悲惨な現状が身近にあるということを再認識していた。



県内外から500人が集まり開幕した「九州セミナー」

山野良一さん講演

千葉明德 短大教授

記念講演として、千葉明德短大の山野良一教授が「この国の貧困と子どもたちの未来」という演題で発表を行った。

「なくそう！子どもの貧困」全国ネットワークの世話人も務めている山野教授は、さまざまな調査データを示しながら、虐待やネグレクト、不健康、親の長時間労働などが貧困に絡んでいると説明。虐待があった家庭の夫婦間不和や育児疲れも貧困問題に影響を与えていると指摘した。

日本の「子どもの貧困」問題には、継続的な貧困率の上昇、ひとり親家庭の貧困率の高

さなどといった特徴があると述べ、社会支出の額をOECD主要国と比較し「日本は子どもに対してお金を使っていない国だ」と批判した。

また、不況による親の収入減で学費を滞納して卒業資格を得られない卒業生「ライシス」について学校現場の声を紹介。高等教育費の

家計負担が諸外国と比較して高いことや奨学金が高利子であることから、たとえ虐待を受けていても経済的に親に頼らないと大学へ進学できない現状を問題視した。

子どもの貧困をなくすために国が投資することでの将来の社会保障費削減を図る「子ども貧困法」を導入したい

ギリスの取り組みを例に挙げ、子どもの貧困解決には社会投資的視点が必要と主張。「子どもの貧困」は子育てをしているすべての家族の問題。日本でも、問題の解決が社会にとつてどのようにプラスになるかの合意形成を図り、私たち全体で考えていかなくてはいけない」と訴えた。



上野満・現地実行委員長

大いに語り連帯しよう

「ようこそおいでくださいました。あいにくと宮崎らしい輝く太陽で迎えでしたが、是非楽しんで帰ってください。」

東日本大震災で被害にあわれたかたがたに、心からお見舞い申し上げます。また、原発事故で今も家に帰ることができない、いつ帰れるかの目処さえ立たない方々、さらには子どもへの放射能の影響に不安なお気持ちでお過ごしの方々に、言葉にできないくらいのご共感と連帯の気持ちをお伝えしたいと思えます。

実は宮崎でも昨年来、鳥インフルエンザや、口蹄疫、新燃岳の噴火など次から次へと衝撃的な出来事が起こりました。口蹄疫は県民の生活全体に大きな打撃を与えました。大量の牛や豚の殺処分など、慣れない業務に心の健康を崩された方の報告もなされております。

現地実行委員会では、この一年間さまざまな企画に取り組んできました。「子どもの貧困」のパネルディスカッションは、今日のメイン企画の原型となりました。そして若者たちの働き方や、メンタルヘルスを学習する企画を開催。毎回100名近くの参加があり、今回のセミナーでもっともつと中身が深められると思います。皆さん、大いに語り、学習し、そして大いに連帯の輪を広げましょう。

母子家庭の支援大切 / 生活保護の充実必要

「子どもの貧困からみえる大人の働き方」と題したパネルディスカッションでは、現地実行委員長で宮崎生協病院小児科医の上野満さん、子ども虐待防止みやざきの会会長の甲斐英幸さん、元小中学校事務職員で橋口幽美さん、県弁護士会子どもの権利委員会副委員長で谷口純一さんがパネリストとして登壇。弁護士の成見暁さんがコーディネーターを務めた。

まず、宮崎の現状について、上野さんは乳児健診で経験したことを紹介。生後6カ月の乳児の栄養状態が良くなく、離乳食も沐浴も保育園で施されていた。その2年後には、その兄の小学生が嘔吐と脱水症状で自宅にいるのを担任がみつけ、母親と連絡がつかず、児童相談所が保護した。市の職員らの尽力で、何とか、生活保護を受給することができた。その後、生まれた乳児の健診を見ると、ふつくとよく食べて、「だつてよく食べるんですもの」と母親はうれしそうだった。この体験を通して「どんなに親に思いがあっても、貧困の中ではまともな子育てはできない。私はもっと早くそのことに気付くべきだったと反省した。やはり貧困は親の責任だろ

パネルディスカッション

「子どもの貧困からみえる大人の働き方」



専門家として、宮崎の現状や改善策などを話すパネリスト

うか、ということをも、みなさんと話してみたい」と投げ掛けた。

甲斐さんは「貧困は雇用者全体に占める非正規の急増を挙げ、08年度版青少年白書によると、雇用者の割合は増加傾向

谷口さんは「債務整理手続きなどの仕事を手掛ける際、貧困や格差を実感する。宮崎では世帯月収が20万円を超えていることが珍しく、これは全国的な世帯平均支出よりも明らかに少ない。

また、とある裁判官が「宮崎では2度目の破産をする人が少なくない」と言っていたが、これは宮崎での生活が本当に厳しいことを意味しているのではないかと思う」と話した。

懸念すべきこととして、若年層の非正規雇用の急増を挙げ、08年度版青少年白書によると、雇用者の割合は増加傾向

橋口さんは「公的な教育費の負担も少なくない」と指摘。「表面化した事例でしか気付かないことが多いが、潜在的に苦しんでいる人はもっといる。そのことを意識的に考えていく姿勢が大事だ」と訴えた。

県外客ら続々 受入態勢万全

2月の結成総会以来、20回を超える会合を重ね、開催に備えてきた現地実行委員。中、駐車場や会場案内、



来場客を温かく出迎える受付スタッフ

受付など、計画通りに行動し、県外客300人をはじめとした約500人の来場者をスムーズに受け入れた。

受付では担当の12人が「こんにちは」と明るく声を掛けながら出迎える。来場者の地区別に分けられたテーブルで名簿をチェックしたり、計算を行ったりした。また、セミナーに集中してもらえよう

に受け入れた。受付責任者、コアプみやざき労組の淵上和子さんは「規模のイメージが難しかったが、スタッフの機敏な対応もあって順調にできたと思う。ほっとしている」と安堵した様子。

同委員会事務局局長で宮崎民医連の吉田博明さんは「初日は予想以上に多くの人に来ていただいた。明日のシンポジウム、分科会までみんなで協力して成功させたい」と気を引き締めていた。

2日目も盛りだくさん シンポジウムと91本の分科会報告

「大災害の中で働く人々の健康をどう守るか」

二日目は、シンポジウム「大災害の中で働く人々の健康をどう守るか」を開くほか、8会場の分科会

会で合計91本の報告を予定している。

分科会会場はすべて4階で、テーマは以下の通り。

第一分科会(大会議室)「職場のメンタルヘルス」
第二分科会(大会議室)「医療現場からみた貧困問題」
第三分科会(中会議室)「労働安全衛生委員会」
第四分科会(小会議室)「高齢者医療・介護」
第五分科会(学習室)「子供・若者の貧困」
第六分科会(和室)「医療・介護労働」
第七分科会(ギャラリーA)「アセスメント」
第八分科会(ギャラリーB)「労働安全衛生委員会」

活動の実践

九七三 in 宮崎

号 外

「第22回人間らしく働くための九州セミナー in 宮崎」2日目は6日、宮崎市民プラザで開いた。500人が参加。シンポジウムや、合計91本の報告があった八つの分科会を通し、様々な労働現場が抱える問題について理解を深めた。

家族のため自分守る工夫

シンポ「大災害の中で働く人々の健康をどう守るか」



災害労働の実態や問題点について意見を交換したシンポジウム

オルブライトホールでは、「大災害の中で働く人々の健康をどう守るか」をテーマにしたシンポジウムを開いた。医師で同セミナー代表世話人会議長の田村昭彦さんがコーディネーターを、城北病院石川県精神科医の松浦健伸さん、県公営企業労働組合委員長の釘元英

具体的な安全指示必要

俊さん、全国建設労働組合総連合労働部長の宮本一さん、宮崎日日新聞社報道部次長の吉岡智子さんがシンポジストを務めた。釘元さんは、昨年、宮崎で発生した口蹄疫での家畜の殺処分作業

などについて、「現場はまさに地獄。血と体液と糞尿の海の中で、黙々と作業を強いられた」と説明。「決して無理をするなとか、辛くなったら休めという漠然とした指示しか受けなかったが、現場に行くは無理をしないといけない状況だった。安全を確保するために

は、具体的な指示が必要だ」と指摘した。吉岡さんは、今年の新燃岳噴火取材について、体感する振動や降灰で臨場感や緊迫感があったものの、「被災者の声が聞きたい、いい写真が撮りたい

という思いの方が強かった」と振り返った。雲仙普賢岳の大火砕流の教訓は重く考えざるを得ず「予測不能で経験がない災害。たとえ他社に抜かれても、絶対に犠牲者は出さないと、局長以下で確認し

た」と話した。宮本さんは、福島原発復旧現場の電気工や配管工の労働は過酷を極め、重層下請け構造による劣悪な状況を説明。「元方が責任を負わないシステムになっている。下請けまで安全教育や措置が行きとどかない。労災が拡大する恐れがある」と指摘した。



熱心に報告に耳を傾ける第2分科会の参加者

松浦さんは、東日本大震災のボランティアの教訓として、「必要な支援は、時期がある。ニーズと段階に応じた支援をしなければいけない」と説明。現地と外からの支援者をうまくつなぎ合わせるコーディネーターの必要性を訴えた。

分科会報告91本現場の声続々と宮崎市民プラザ4階では、メンタルヘルスや高齢者医療・介護福祉、アスベスト問題などをテーマにした八つの分科会が開かれた。医療機関や労働関係者

らが、直面する課題についてプロジェクトを使いながら発表し、参加者は現場からの声に耳を傾けていた。第2分科会では、「医療現場からみた貧困問題」というテーマで11人が発表した。宮崎生協病院外来看護師の宮

田知春さんは、糖尿病予約外来の中断を繰り返した末に孤独死した患者のケースを報告。「格差社会、医療費負担増から起こる受診抑制などが原因で、外来受診時にはすでに重症化している例が増えている」と指摘した。

編集後記
二年前の熊本大会に参加して、その濃さに「この活動は掛け値なしに伝える価値がある」と感じた。今回、実行委員会に関わったのは何かの縁だ。4回の学習会などを通し、委員や専門家が奮闘する様子を間近にし「宮崎にもこんなに情熱的な人材がいる」と頼もしく感じていた。微力ながら委員会で主張したり、譲ったりと試行錯誤した約1年を振り返ると、まさに「人間らしい」時間だった。労働者自らが考え、行動したから得た境地だと思ふ。規模は他県に劣るものの、委員会が伝えたことは伝えられたのではないだろうか。バトンは渡せた。

来年は長崎市で会いましょう！

2012年11月10日(土)~11日(日)



「かんぱ~い!」。副実行委員長の西田隆二さんの音頭でグラスを掲げ、さらなる交流を誓った

交流会 大盛況



会場を盛り上げた宮崎民医連による「ひよっこ踊り」



鷗野哲良さん(宮崎市)の尺八に合わせ、大坪勝美さん(同)が高らかに「刈干切唄」を披露

「人間らしく働くための九州セミナー in 宮崎」の夕食交流会は11月5日夜、宮崎市の宮崎観光ホテルで開いた。九州を中心に全国の働く仲間324人が集い、酒を酌み交わしながら大いに歓談。宮崎県の郷土芸能「ひよっこ踊り」の披露などアトラクションもあり、会場のおちろこちらで笑い声が響いた。交流会の様子を写真で紹介する。



各県ごとにステージへ上がりあいさつ。次回開催に意欲を見せる長崎県グループ

【建交労長崎県本部・中里研哉さん(57)】毎年参加していますが、今回は内容が格調高く、とても良かったですね。来年は長崎県での開催。よりの質を高め、今年以上のものにしたいと今から張り切っています。

【福岡市職員労組・松永真二朗さん(39)】10回ほど参加しています。今回、今回のテーマは、実際に考えがいのあるもの。身内に教育関係者がいることもあり、興味深く拝聴しました。

【佐賀県医療生協・有馬裕美さん(51)】自身、家族を守るために

【熊本県建築労組・湯前弓さん(48)】貧困に限らず、労働環境が悪くなり、結果的に親と子の触れ合いの時間が少なくなっていると感じます。問題の本質を勉強して、しっかりと声を上げるのが大切だと思います。

【コープおきなわ・大塚修二さん(48)】今回初参加です。大規模なので驚きました。子供の貧困など、さまざまな問題に対し、皆さんとつながりながら、まずは知るこ

チョットひと言



盛況だった初日を終え、互いに労をねぎらう参加者